

依頼主

直樹の父さんが十名の社員のまえではなしはじめたのは、朝のラジオ体操がおわった直後だった。

「みなさん、この未曾有の不況を、全員一丸となって乗り越えましょう」

東大阪市の小さな町工場の経営者である直樹の父さんは、おもわず声をうわずらせた。

高校を出てすぐ、父さんの工場の機械工となってまだ日のあさい直樹もまた、周辺の工場がばたばたと倒産していく状況をまのあたりにしていた。

だからこそ直樹には、父さんがじぶん社員を、ふるいたたせようとやっきになっているきもちがよくわかった。

直樹の工場は、ネジ一本から人工衛星の部品にいたるまで、どんな注文も対応できるだけの、技術と設備をかねそなえていた。小学生のとき、父さんが七夕の夜、空をかけぬける光の点をゆびさして、あの人工衛星は、わしが手がけた部品で飛んでいるんだと、めずらしく得意げにいったことを直樹はいまでもはっきりおぼえている。職人あがりの父さんが、油にまみれた作業場で、機械相手にこつこつと働いている姿が、そのことといっしょにおもいだされた。

反面直樹は、そんな父さんの愚直なまでの職人氣質に、はがゆいものをおぼえないでもなかった。

人工衛星の部品製造の高度な技術をもっと喧伝して、よそから受注を奪うぐらいのしたたかさをもてばいいのに、そういうことはいっさいしない父さんだった。お爺さんの代からつづく得意先があるからなんとかやっつけてはいるが、それらの会社もいつ、どうなるかもわからない状況では、社員を激励する父さんの声もいやがうえに、不安と緊張でうわずるといふものだった。

奇妙な依頼人が工場をたずねてきたのは、その日の午後のことだった。

ようやく夏もすぎて、しかしまだありありと暑い日々のなごりがそここにうかがわれる初秋に、その人物はぶあついコートにすっぽり身をつつみ、頭には帽子を、そして顔には大型のマスクをかけていた。そのうえ目には、まっくろなめがねをかけていたので、ほぼ百パーセント素顔はかくされていた。

応対にでた直樹の母さんも、さすがに色をうしなった。しかし相手が、マスクごしに、「仕事の依頼にきました」

といったので、とりあえず作業場のおくにある事務室におしたのだった。

「まるで、コンピューターがしゃべっているような声だったわ」

あとで母さんはそんなことを直樹にいった。

それでも、相手がお客さんとなれば、母さんはお茶も出し、まだまだ暑いですわねとあいそのひとつもいって、直樹に呼びにいかせた父さんのくるのをまった。

「まいどどうも」

いいながら父さんは、うしろに直樹をつれて事務室にはいつてきた。いずれこの工場を継がすことになる息子に、いまから受注の仕事もみせておくつもりだった。

相手は、室内にはいつても、奪ったキャッシュカードで ATM で金をひきだそうとしている強盗のようないでたちのままだった。帽子までまだ、頭にのっていた。

とはいえ、客にぬげともいえず、父さんは気にしていないふうをよそおいながら、テーブルをはさんで客の正面に腰をおろした。

その父にむかって客は、開口いちばん、

「わたしは、ムラチといいます。関口テックの紹介できました」

「ほう、関口さんの——」

父さんの警戒心が目にみえてとけだすのがわかった。

関口テックは、ここから自転車です十分ぐらいのところにある、ふだんから親しくしている同業者だった。受注がおおいときなどはおたがい、分担して期日にまにあわせるということも、以前はよくあった。

「関口さんが、わたしのとこへ、行けゆうはったんですか？」

マスクの男はうなずいた。

「へえ……」

直樹はそのとき、父さんの顔に、矜持のようなものが浮かぶのをみた。

「それは、どんなものですか？」

すると相手は、コートのうちポケットから、折りたたんだ紙をとりだした。

ふしぎなことに、彼がそれをひろげると、そこにあるはずの折り目がきれいになくなっていた。

テーブルにひろげられた紙には、ある部品の完成図と断面図がプリントされていた。

特殊なスクリュー。それが直樹の第一印象だった。ただ、構造は複雑で、羽根の部分がややこしく入り組んでいて、精密度を保つのに骨が折れそうだった。

はたして客は、

「これはある推進装置の中核部分です。どうですか、造れますか？」

父さんは即答をさけて、いまいちど用紙のうえに顔をちかづけた。なんどか父さんの鼻から、おもたげに息がもれた。

「量は、どのくらいでっか？」

「一個です」

それを聞いたとき、直樹はとっさに、父さんにことわってくれることを願った。こんなもの一個をつくったところで、てまひまかかただけで、いくらにもなりはしない。関口テックが断ったのも、そのためだろう。

ところが父さんは、ふたつ返事で、

「引き受けましょう」

「一週間でできますか」

「やってみます」

「費用は？」

父さんが口をひらくよりもはやく、母さんがよこから金額を提示した。別注で特殊なも

のだからという理由で、その額はやすくはなかった。

「わかりました」

相手はさっきとは反対のうちポケットに手をつっこみ、あきらかに札束の厚みをみせる封筒をとりだした。

「超過分をみこしたぶんもはっています」

封筒の中身をたしかめた母さんは、その額の多さをふたりにしめすために、目をまんまるにみひらいてみせた。

一週間後にまたくるとことわって、客がかえるとすぐに、父さんは関口テックに電話をかけた。

関口テックの社長のいうことと、いまの依頼主のはなしに、矛盾するところはひとつもないことがわかった。ただ、直樹の予想とはちがって関口さんも、部品を完成させていて、ちゃんと報酬もえているとのことだった。その完成品が機能をはたさなかったことは、父さんの電話ではじめて関口さんはしったのだった。

「コストもかかってんねんから、もろときいな」

の父さんの電話から直樹は、機能もはたさない製品をわたしたことに関口テックの社長が、うしろめたさをおぼえていることをさっした。そしてさいごに父さんが、あらたまつた調子で、

「うけた仕事は、かならずはたしま」

と力づよくいきるのを聞いた。

それからの父さんは、ほんとうに鬼のようになって、あの部品造りに没頭するようになった。関口テックが失敗しているだけに、よけい闘志がわいたにちがいない。そして造るにつれて、これがそうとう難解なしろものだということがわかってきた。どうりで依頼主がはじめから超過分の金をおいていったわけだ。父さんは製作にはいつて三日目から、ほとんど夜なべ状態になっていた。みかねてほかのものが手伝おうとするのを、父さんはじゃけんにつっぱねた。

「これはわしのしごとや」

そういうときの父さんの顔には、執念のようなものがみてとれた。

じっさい、そばからちらと直樹がみたところでは、これは父さんのような年季のいった熟練工でなければ、とうてい歯がたたないしろもののだとわかった。

母さんはそのうち、父さんの身をしんぱいしはじめた。もうやめたらとそっと、声をかけることもなにかあった。直樹にしても、一元の客の依頼に、ここまで骨身を削ることがあるのかと、またしても父さんの愚直さに、腹を立てたりした。

一週間後、父さんは部品を完成させた。完成図をみたとき以上に直樹は、完成品のその複雑きわまる形態に一驚した。

「いったいこれ、なにに使うんだろ？」

湧き上がる好奇心がおさえきれずに彼は、客がこれをとりにきたらかならず、用途をきいてやるつもりでいた。

ところが、朝一番に、一週間まえとまったく同じスタイルでやってきた依頼主は、ほとんど一言も口をきくことなくダンボール詰めされた製品を抱えるなり、さっさとかえって

いった。なかばあつけにとられて見送る直樹に、けしかけるように父さんがいった。

「はやく、お客のあとを追うんや」

ものといたげにふりかえる直樹に、父さんはたたみかけた。

「わしの造った部品が、役立ったかどうか、たしかめてこい」

「わかった」

直樹は全速力でかけだした。

依頼主の足どりは、おそろしくはやかった。となりまちにあった高校に、電車をつかわず三年間、通学しつづけた直樹も足には自信があったが、その彼がとうとう走り出すほど相手の歩みははやかった。

依頼主は、裏山の上がり口の石段を、なおもあがってゆく。このうえには公園があり、さらにあがるとだだっぴろい草原がひろがっていた。

いったい、どこまでいくんだらう。

直樹がそんな疑問にとらわれたのは相手が、公園をぬけて、なにもない草原にまでたどりついたときだった。草原のさきには、樹木におおわれた急な傾斜地があるばかりで、そこはあまり人も踏み込まないところだった。

依頼主はふいに、まるで目の前に何かがあるような、慎重な足取りになって、前進をはじめた。

はじめのうちは、公園をとりまく生垣に身をひそめてみまもっていた直樹だったが、相手がまったく背後に気をはらっていないことがわかると、そこから出て大胆に距離をちぢめた。

そのとき依頼主は、あたまをあげて、なにか甲高い声をあげた。てっきり、公園に飼われている鹿の鳴き声と直樹がおもったのもむりはなかった。

が、その瞬間、男の眼前に突然、これはなんだろう、紡錘型の、銀色にかがやく物体が出現した。直樹は自分の目をうたぐった。しかしかれは、じぶんなりに精一杯、いまみた出来事を、理性的に解釈しようとした。每日一ミリの何分の一の精度をもとめられる仕事をしているたまものだった。

紡錘型の物体は、可視光線をシャットアウトして、みずからを透明にできる機能を装備しているとみてまちがいない。ちかい未来、そのような兵器が開発されるということを以前、雑誌でよんだ記憶があった。だがまだ、それが完成したという話は聞いたことがない。まだまだSFの世界だ。

紡錘型の物体のなかから、ひとりの、これはほっそりした人物が姿をあらわした。

短い髪に、輪郭のととのった顔立ち、ふしぎと男女のくべつのつかないその人物は、依頼主かられのしろものがはいった箱をうけとると、てきばきとした動作で箱の中のものをとりだした。父さんの手になるあの、複雑きわまる製品を、かれはなんでもないもののように手にして、紡錘型の物体の横手に移動した。そこで身をかがめると、おそらくそこに操作スイッチでもあるのか、何回が指さきで押すしぐさをみせた。

やがて、ある箇所が開閉されたとみえ、かれがそこから製品を注意ぶかくさしいれるのがうかがえた。

それがすべてだった。ふたりはまもなく、物体の中に入っていった。物体がふたたび、一瞬にして透明になったのは、その直後のことだった。

それからあとは、数秒間つづいた低い振動音と、あざやかなシアン色の炎が、地面をはなれて空中に、みるみる上昇していくのが目にとらえられたただけだった。

なんだかほろらかな気持で直樹の胸はふくらんでいた。草原でじぶんがみたものがなんだったのか、いまだにさだかではなかったが、あの紡錘型の物体が、父さんの造った部品で動くようになったことだけはまちがいないようだった。

父さんはいっていた。この部品を使うような装置は、世界のどこにも存在しないと。そこからかんがえだせるものは、なんだろう……。

直樹はしかし、そのさきは、父さんのまつ工場にもどってからにしようときめていた。

あるいているうちに、胸がわくわくしてきて、しらずしらず、彼の足ははやくなってくるのだった。

了